

イングランド宗教改革と巡礼の消滅

— イギリスにおける近年の巡礼研究を手がかりに —

吉田正広

はじめに

本稿では、近年イギリスの巡礼研究はどのような問題を提起しているのかについて最初に整理した上で、具体的な課題として、宗教改革期における霊廟の破壊あるいは聖地巡礼の消滅の問題を論じるつもりである。しかし、宗教改革以後のプロテスタント信仰において、巡礼概念がまったく消滅してしまったわけではなく、むしろキリスト教徒の進むべき理想的な人生の在り方として、「巡礼」概念はその後にも存続したとさえ言える。本稿ではこの問題に対する研究の手がかりを得られればと思っている。

I イングランドにおける巡礼をめぐる諸問題

近年におけるイギリスの巡礼研究の成果を端的に表していると思われる研究に、C. Morris and P. Roberts (eds.), *Pilgrimage: The English Experience from Becket to Bunyan*, Cambridge, 2002.がある。本書は、2000年にケント大学で行われたイングランドの巡礼に関するコロキウムを基にした論文集である。イギリスの巡礼研究の現状を知るためにも、本書の提起している諸問題を簡単に紹介しておきたい。

第1に「巡礼 (pilgrimage)」の定義についてである。pilgrimの語源がラテン語のperegrinus(旅行者、異邦人、外国人、移民などの意)であることはよく知られているが、特に本書で強調しているのは、「巡礼」には本来二つの意味が含まれているという点である。12世紀頃の使い方として、第1に「聖地巡礼」shrine-seekerとしての巡礼である。第2は、キリスト教徒の信仰生活全体の象徴としての巡礼概念である。例えば、「巡礼はわれわれの人生」(グレゴリウス1世、6世紀)や「天上のイェルサレムを目指す旅」(7~12世紀の修道士)という言い方に見られる。この2つ巡礼概念はイギリスの宗教改革以後の巡礼概念を考えるときに重要となる。

第2に、イギリスにおいてはフランスなどヨーロッパ大陸諸国に比べると巡礼研究そのものが遅れていることが指摘されている。ヨーロッパの巡礼路の中でイギリスは辺境に位置していたことがその原因の一つであり、唯一国際的な規模で巡礼者を集めた霊廟はカンタベリー聖トマスだけであった。さらに、イギリスでは宗教改革の過程で1530年代に巡礼が突然消滅し、霊廟の破壊も行われ、その97%が消失してしまった。16世紀に大陸ヨーロッパのカトリック世界では巡礼が教会によって積極的に再編成されたのに対して、イギリスでは中世からの巡礼の連続性が途絶えてしまったのである。以上がイギリスにおいて巡礼研究が遅れた理由であるとされている。

第3に、イングランドにおける巡礼の持つ多様性の問題である。すなわちイングランドにおいては、一方で地方巡礼が盛んであり、「巡礼バッジ」の分布状況から、イングランドにおける地方巡礼は1日ないし数日の旅程で可能な日常的な生活の範囲内であって、ヴィクター・ターナーによってキリスト教巡礼一般に対して与えられた「脱日常現象」("liminal phenomenon")という特徴付けには当てはまらないと主張する。また他方で、イェルサレム巡礼が中世には盛んに行われたが、それはヴェネツィア経由のバック旅行として

行われ、巡礼のルートを始めとして、あるべきカトリック信仰を追体験するように巡礼全体が規格化されていたと言う。その意味で、イェルサレム巡礼も決して「脱日常現象」ではなく、日常的な信仰を追体験するものであったと指摘されている。この論文集全体が、ターナーによる人類学的な巡礼概念に対する歴史学からの批判という側面を持っている。

第4に、社会的地位向上の手段としての巡礼の役割である。王や貴族の十字軍参加や、十字軍誓約がそれに当たる。聖地巡礼に参加することがその人物の社会的地位の上昇につながったというのである。

第5に、巡礼の政治性である。カンタベリー巡礼は、国王ヘンリー2世の騎士たちによって大司教トマス・ベケットが殺害されたことに始まるが、聖遺物容器など、教会の中の様々なものに描かれたトマス・ベケット暗殺の図像は反王権的な性格を持っていた。ローマ教会が異例の早さでベケットを列聖したり、ヨーロッパ各地の教会のステンドグラスなどにベケット殺害の様子が描かれたりしたのも、教会側からイングランド王への宗教的な圧力であり、その意味で政治性を備えていたと言えよう。また、他方で、アンジュー家の王たちが各地の霊廟を詣でていたことは、王の権威の機能の一部でもあった。アンジュー家そのものがイングランドとフランスのアキテーヌに領地を持ち、王の巡回が行われ、その意味で最初から国民的規模を超えた性格を有していた。

第6に、巡礼の主目的は、罪の許しと聖人の遺骸の及ぼす奇跡による病気の治癒であったが、それだけでなく、巡礼の旅の途上で当時の高名な聖職者と会えるという社交上の期待や、旅の見聞を広めることなど、幅広い期待が巡礼には伴っていた。

第7に、民衆信仰としての巡礼である。奇跡を記録した一覧表は俗人巡礼者の願いを示すものであり、民衆信仰のあり方を示す重要な史料となる。奇跡は聖人の遺骸がもたらすものであり、また聖地イェルサレムの恩寵は十字架などの聖遺物によってもたらされた。イングランドの地方霊場として近隣から多くの巡礼者を集めたウォルシンガムには「聖母マリアの家」が建てられたが、そこにはパレスティナの治癒力が移転されたわけである。また、聖地への案内役として活躍したのはフランチェスコ会修道士であったこと、俗人の要求や願いが教会生活の中心を占めるような状況において、民衆信仰のあり方として巡礼の人气が高まったことなどが指摘されている。

第8には、宗教改革以後の巡礼についての指摘である。プロテスタントの改革者たちは霊廟の聖性を拒否し、霊廟の聖遺物を嘲笑し、巡礼の価値を否定した。にもかかわらず、宗教改革以後も「巡礼」は重要な文化現象として存続したというのである。一方で「巡礼」は、「世界の探検」やグランド・ツアーという形で「世俗化」した。他方で、プロテスタント信仰は、聖地巡礼を「カトリック巡礼」として否定しつつも、「キリスト者の巡礼」としての巡礼概念を引き継ぐことによって、巡礼の内面化をもたらした。例えば、「人生の巡礼」("the pilgrimage of life") という用法がそれにあたるが、パニヤンの『天路歷程』*Pilgrim's Progress* (1678) やローリーの詩「情熱的人間の巡礼」*The Passionate Man's Pilgrimage* にそのことが示されている。これについては後に述べることにする。

以上がイングランドの巡礼研究に関する論点である。ヨーロッパの巡礼路の中で辺境に位置していることから生じたイングランド巡礼の特殊性と、宗教改革による聖地巡礼の否定から派生する諸問題が論じられているのである。以下本稿では、宗教改革における巡礼の消滅の問題について焦点を当てて論ずることとする。

II 宗教改革と巡礼の終焉

カンタベリー巡礼は、1170年に起こったカンタベリー大司教トマス・ベケットの暗殺事件をきっかけとして始まった。1154年にイングランド国王ヘンリー2世は、ロンドンで首席助祭を務めていたトマス・ベケットを

大法官に任命した。その後、1162年には国王はベケットをカンタベリー大司教の職にも任命したが、ベケットは王の意に反して大法官の職を辞任してしまう。国家の役職よりも普遍的な信仰を選んだのである。その間1164年に王はクラレンドン憲章を發布して教会を王権に従属させるような措置を採ろうとするが、ベケットはそれに断固反対し、状況の悪化の中で大陸へ亡命する。ベケットの不在中に、国王は息子ヘンリーの戴冠式をヨーク大司教のもとで実施する。結局1170年12月にベケットは帰国し、王と和解したが、不在中に国王に協力した聖職者の政務停止措置に固執した。この様なヘンリー2世とベケットの対立の中、12月29日に王の騎士4名がカンタベリー大聖堂の中でベケットを刺殺したのである。その遺骸は地下のクリプトに安置されたが、その殺害の夜から奇跡が起こったと言われている。ベケット殺害はヨーロッパ中に報じられ、また奇跡の報告とともに多くの巡礼者がヨーロッパ規模で集まるようになった。ローマ教皇は1173年に死後3年という異例の早さでトマス・ベケットを列聖したのである。この間、結果的に国王はカンタベリー大聖堂のトマス・ベケットの霊廟に詣でることでローマ教会と和解するに至る。こうしてカンタベリーはイギリスで唯一国際的な規模の巡礼地となったのである。

このようにカンタベリー巡礼は、教会の王権からの独立をめぐるイングランド国王と対立して殉教した大司教トマス・ベケットの霊廟を目指した巡礼であった。そのため、教会に対する批判運動が高まると、巡礼や聖トマスの崇拝に対する非難が起こるのである。例えば、ジョン・ウィクリフおよびその考え方を引き継いだロラズ運動は、14世紀後半に、聖遺物崇拝や巡礼をはげしく非難した。そして、16世紀にヘンリー8世による宗教改革が進められ中、聖遺物の破壊や聖人崇拝の禁止が命じられ、1538年にはカンタベリー大聖堂のトリニティー・チャペルにあった聖トマスの霊廟そのものが解体され、遺骸は行方不明になってしまった。ベケットの遺骸そのものが燃やされたと言う噂がヨーロッパ中に広がったりもしたのである。現在でもベケットの遺骸は行方不明のままである。

この様に宗教改革の過程で、巡礼そのものが王権によって否定され、また、トマス・ベケットは国王や国家に対する反逆者として烙印を押されたのである。

III 宗教改革以後の巡礼

さて、この様にイングランド宗教改革の過程で、聖遺物崇拝とともに巡礼は原理的に否定された。その結果、聖トマスの霊廟も破壊される中で、カンタベリーを初めイングランドの多くの巡礼地では霊廟が破壊され、消滅した。この様な中、宗教改革以後には、巡礼概念は全く消滅してしまったのだろうか。確かに、プロテスタント改革者は霊廟の聖性を拒否し、霊廟の聖遺物を嘲笑し、巡礼の価値を否定しはしたが、「巡礼」は様々な形で生き延びることになる。

第1に、「巡礼」の世俗化という形で「巡礼」が生き延びたのである。例えば、「世界の探検者」が「巡礼者」として表現された。『パルナッソス巡礼』*The Pilgrimage to Parnassus*, 1600 やサミュエル・パーチャスが編集した当時の世界各地の旅行記の表題に「巡礼」が使われている (*Purchas his Pilgrims*, 1625)。また、貴族の子弟の教育の仕上げとして行われたグランド・ツアーも、世俗化された巡礼としての性格を有していたとされる。すなわち、グランド・ツアーでのイタリア旅行は、当時貴族の中に多く存在した「隠れカトリック」信者にとっては文字通りのローマ巡礼であったし、芸術作品の購入を伴っていたのである。このようにグランド・ツアーに代表される貴族のイタリア旅行は、カトリック信仰と芸術の保護とが結合したものであると言えよう。

第2に、プロテスタント的巡礼概念として、「キリスト者の人生の象徴」としての巡礼概念が存続することになる。すなわち、カトリック信仰からプロテスタント信仰へと巡礼概念が移転することになる。カトリッ

クにおいても、「聖地巡礼」(shrine pilgrimage) のより深く完全なものとして「人生の巡礼」("the pilgrimage of life") という考え方が修道士などに伝えられてきたが、プロテスタントは両者をはっきりと区別する。「今この時に私は、キリスト者の巡礼 (the Christian man's pilgrimage) と呼べるようなある特別な巡礼について申し上げなくてはなりません。しかしながらあなた方は、私がカトリック巡礼 the Popish pilgrimage について話をすると思っはなりません……」(ラティマー主教、1625年)。パニヤンの『天路歷程』では、明らかにプロテスタント的な巡礼概念に完全に移行しているのである。

この様なカトリック的な巡礼概念からプロテスタント的な巡礼概念への移行過程にある「失われた環」が、ウォルター・ローリーの作とされる「情熱ある男の巡礼」*The Passionate Man's Pilgrimage* と題する詩である。この詩は、処刑を間近に控えたローリーの心境を語ったものとされている。

静寂のホタテ貝を与え給え、
歩く支えとなる信仰の杖を、
不死の糧となる喜びの頭陀袋を、
救済の小瓶を、
希望の確実な保証となる栄光の法衣を
私に与え給え、
そうすれば私は巡礼に出かけるのに。

この詩において、帆立貝、杖、頭陀袋など今日でも巡礼の目印とされるカトリック的な聖地巡礼の目印が、牢獄にある作者の抽象化され内面化された信仰の問題に置き換えられているのが理解できよう。

終わりに —— 20世紀における和解？ ——

1935年カンタベリーで、T.S.エリオット作の『寺院の殺人』が上演された。この作品は、トマス・ベケット暗殺を題材にしたものであるが、登場人物は、クリスマスのミサを控えたベケットの前に現れてベケットに富や名誉をささやいて誘惑する4人の誘惑者と、ベケット、さらにベケットを殺害した4人の騎士である。この劇の山場は、最後にベケットを殺害した4人の騎士が、ベケット殺害を弁明する場面である。ベケットは国王に対する反逆者であること、さらに、ベケットは騎士たちから逃げようと思えば何回か逃げるチャンスがあったにもかかわらず、騎士たちを怒らせ、あえて自らを殺させようとしたというのである。つまりベケットは自ら進んで殉教者になって聖人になろうとしたのではないかという疑念である。クリスマスのミサを控えた生前のベケットの前に登場する4人目の誘惑者も、ベケットが自ら進んで殉教者になろうとしており、そのように自らの意志で殉教するものは聖人にはなれないと指摘し、ベケットの心に深くその発言が突き刺さったのである。このように20世紀に入って、ベケット暗殺の演劇が上演されたこと自体、イギリスにおける信仰の変化を見て取れるのではなからうか。

さらに1982年5月29日には、当時のカンタベリー大主教ロバート・ランシーとローマ教皇ヨハネ・パウロ2世がカンタベリー大聖堂内部の殉教の場所で共同の祈りを行った。現在、聖堂内の殉教の場所にはこの旨のプレートが壁に張られている。このように20世紀にベケット殺害事件が改めて注目され、それを題材とした芝居が上演されたり、ローマ教皇との共同の祈りが行われたりしたことがどのような意味を持っているかについては、筆者の今後の研究課題としたい。

<参考文献>

C. Morris and P. Roberts(eds.), *Pilgrimage: The English Experience from Becket to Bunyan*, Cambridge, 2002.

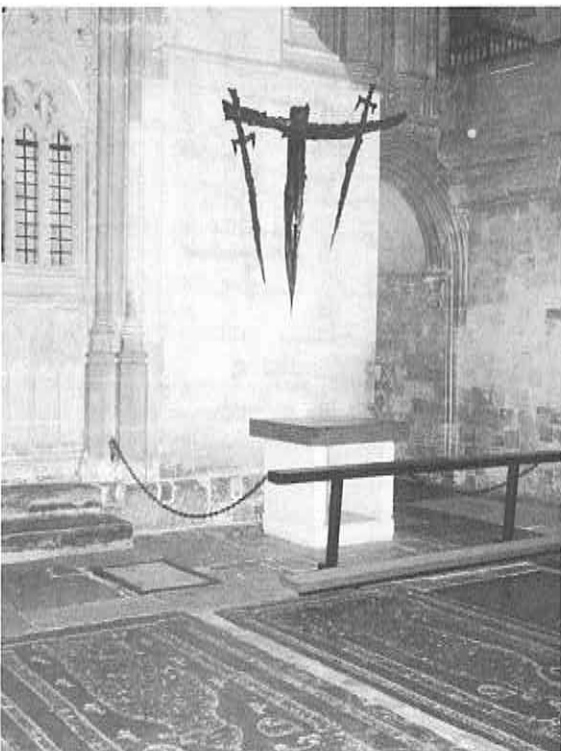
T.S.エリオット（高橋康也訳）『寺院の殺人』《リキエスタ》の会、2001年。



カンタベリー大聖堂



聖トマスの奇跡を表したステンドグラス



トマス・ベケットの殉教の場所



かつて聖トマスの霊廟のあった場所（トリニティ・チャペル）